

## 梅川文男研究（5）

### 「プロレタリア詩人・堀坂山行の戦後」

尾西 康 充

#### 【要旨】

本論文は、戦後の梅川文男の足跡を明らかにしたものである。終戦直後の労働組合・農民組合再建の頃から、三重県議、松阪市長時代、そして死去に至るまでを取り上げた。

#### 序

第二次世界大戦中、アメリカ軍は日本の主要都市を空爆し一般市民を対象とした大量無差別殺戮を行った。東京大空襲や広島・長崎の原子爆弾投下に象徴されるアメリカ軍の非人道的行為は、今日に至るまでいささかの反省もなく継承されている。これまで反共・反独裁を旗印にして朝鮮半島やベトナム、アフガニスタン、イラクに大規模な空爆を繰り返してきた。三重県では、三、六〇〇名に上る人々がアメリカ軍の空襲によって死亡した（経済安定本部『太平洋戦争による我国の被害総合報告書』）。

一五年戦争中、三重県出身の軍人・軍属の戦死者は四六、三八三名とされる。その内、いわゆる「外地」では四四、一八九名、「内地」では二、一九四名が戦没している<sup>1)</sup>。国際情勢の把握に無能力であった日本政府の外交方針のために、多くの兵士はアジアの民衆を支配する侵略戦争に動員されると共に、自らの生命を失ってしまう結果になった。一

九三七年七月七日、盧溝橋事件が生じ戦争が勃発すると、国内のムードは一変した。戦時体制が急速に強化され、一般市民の日常生活に対する統制が厳しくなった。創立当初から政府と対決する立場をとり続けていた左派の諸団体も抵抗を主張するだけでは、対外拡張を是認していた世論の支持が得られなかったために、政策に迎合する形で自らの要求を達成する方法に転換した。

三八年四月一日、第一次近衛文麿内閣が国家総動員法を公布する。それに応じる形で全国水平社（全水）は綱領および運動方針大綱を改変する。六月一日、大阪市浪速区芦原町葦原市場集会所で開催された全水中央委員会では、新綱領「吾等は国体の本義に徹し国家の興隆に貢献し、国民融和の完成を期す」と、新運動方針「一、国家総動員法への積極的参加 二、民族発展策への協力、国策移民の遂行に協力すること」とが提案された。これまで全水は左派と右派とに分裂しながらも基本的には明確な階級意識のうえに解放運動を進展させるというマルクス主義思想に拠っていた。ところが戦時体制下で急転回し、「国体の本義」に徹して「国民融和」の完成を目指し、国家総動員法に貢献して国策移民の遂行に協力するという立場に変わったのである。

三九年五月二三、二四日の三重県厚生会の地方会長会議では、議題として「満蒙移民の就職斡旋」が取り上げられ、国策移民の奨励策が話し合われた。皇族の資金的援助を受けて設立された融和団体であった三重

県厚生会は、行政が主導する融和政策の実践主体であり、三重県の融和運動を「天皇主義・精神主義的性格」の濃厚なものにした<sup>(3)</sup>。全水であれ融和団体であれ、移民という形で被差別部落の問題を解消させようとする態度の根底には、アジアの民衆に対する蔑視があったといわざるを得ない。そもそも差別糾弾の闘争は土地を奪われた者たちの憤怒から起こったものであったにもかかわらず、アジアの民衆の土地を奪うことには何の痛みを感じない致命的な欠点があったのである。三重県の被差別部落では、県厚生会囑託として満州視察旅行を終えた上田音市と県社会課とによる奨励に応じて三八年から五年間で少なくとも五九名が移住している<sup>(3)</sup>。

アジアの民衆に対する蔑視に関していえば、三重県では戦時中に、熊野市木本町でトンネル工事に従事していた朝鮮人労働者二名が撲殺される事件があった（一九二六年一月三日）。また一九二八年から二年間施工された名賀郡青山町と一志郡白山町をまたがる近鉄青山トンネル工事では、朝鮮人労働者八名が過酷な作業中に事故死している。いずれも日本政府が朝鮮半島を植民地化し、無辜の市民を強制連行して非人間的な労働を強制した結果生じた。他方、南牟婁郡紀和町にある石原産業株式会社会社紀州鉦山では、朝鮮半島各地から強制連行されてきた朝鮮人労働者が銅鉦の採鉦・運搬等に就労していた。過酷さのあまり逃亡を企てた労働者が熊野川で水死するという悲劇や、労働生活環境の改善を求めて抵抗を始めるや否やそれが弾圧されて闘争に参加した者たちが有罪判決を受ける事件も生じた。日本の敗戦と共に、同鉦山にいた朝鮮人労働者七五五名とその家族五九三名が解放された。彼らは郷里に戻るための旅費や飯米を要求して鉦山当局との対決姿勢を強め、四五年一月二四日から一二月一八日までの間に一、二六六名が帰還した。『三重県労働運動

史』には、彼らの要求は戦後の「三重県における最初の労働争議」として記録されている<sup>(4)</sup>。紀州鉦山で強制労働させられていたのは、朝鮮人労働者だけではなかった。四四年六月、マラヤやシンガポールで捕虜になって泰緬鉄道工事に就労させられていたイギリス軍兵士三〇〇名が同鉦山に送られてきた。彼らもまた過酷な鉦山労働を強制させられ、その結果、一六名は生きて祖国の地を踏むことはなかった。当時の状況を知ら手がかりとして、イギリス軍兵士が往時を回想したジミー・ウオーカー『戦争捕虜二九一号の回想 タイメン鉄道から南紀イルカへ』が出版されている。同書の一節には「私たちのここでの一五か月間の労働は、イシハラ産業には何の犠牲も払わせなかった。犠牲になったのは、立派な一六人の若者の命、損なわれたのは生き残った者たちの健康だった。この会社は、今日までずっと繁栄している」という辛辣な表現がある<sup>(5)</sup>。

四五年一〇月二五日、松阪市魚町にある青柳旅館で解放運動回顧懇親会が開催された。吉村亀太郎、達寅吉、北村大三郎が発起人となって、治安維持法の犠牲となった同志に出席を呼びかけた。大西俊夫や河合秀夫、遠藤陽之助、梶田茂穂、西光万吉他七三名が県の内外から集合して、厳しい弾圧に遭いながら無事に戦後を迎えることができたことをお互いに祝いあった。三・一五事件と非常措置事件で獄につながれた梅川文男も同懇親会に参加しており、出席者名簿には彼の現住所は松阪市大工町と記されている。出席者にとって最大の関心事は、どのように日本共産党の県組織を再建するかという問題で、戦前の社会大衆党との関係や、戦後のアメリカ占領軍の方針なども考慮に入れて話し合われた。会合は党再建という結論に達し、その後、連合国最高司令官総司令部（GHQ）の命令によって四五年一〇月一〇日に釈放されて大阪にいた志賀義雄の

許を二、三名の有志が訪ねた。三重県の現状を話した彼らは志賀から組織的な指示を受け、再建の準備を急いだ。翌年一月に松阪市で党三重地方委員会が結成され、四月二十九日に県党本部が設置された松阪市で第一回地方党大会が開催された。当時、三重県の党員数は八五名であったという。この大会で木村繁夫が県委員長に選ばれ、敗戦時鎌倉に在任していた梶田茂穂が県書記局の責任者として迎えられることになった。さらに地方委員一〇名と常任委員五名が選出された際に、梅川は地方委員に就くと共に文化部の組織活動の指導を任じられた。このようにして戦後本格的に再出発した三重県の解放運動をたどりながら、本稿では梅川の戦後史を明らかにしたい。

# 一

日本の民主化政策を急速に推し進めていたGHQは一九四五年一月四日、「政治的、市民的及び宗教的自由の制限の除去に関する覚書」を発表し、治安維持法および特高警察の廃止と政治犯の即時釈放を命令した。一〇日には全国で約三、〇〇〇名に及ぶ政治犯が釈放され、予防拘禁所から出獄した日本共産党員の徳田球一、志賀義雄は「人民に訴ふ」という声明を発表して政治活動を再開した。すべての治安維持法違反者はGHQの指令にもとづいてその罪歴が抹消された。

マッカーサーは首相就任直後の幣原喜重郎に対し「人権確保に関する五大改革」を指示した。すなわち(一)婦人の解放、(二)労働組合の助長、(三)教育の自由化・民主化、(四)秘密弾圧機構の廃止、(五)経済機構の民主化であった。右の二番目、「労働者を搾取と酷使から防衛すること及びその生活水準の向上のため有効なる発言を許容するが如

き権威を与えるために労働組合を促進助長すべきこと」という労働組合に関する指示に従って労働組合法が制定され、各地で組合が次々に誕生した。三重県では四五年十二月一日、南牟婁郡鵜殿村の鵜殿自由労働組合が結成されたのに続いて、同月一日に津市の伊勢新聞社従業員による全日本新聞労働組合三重支部が設立され、さらに同月二五日、県内最初の労働組合として大正以来の歴史を持つ三重合同労働組合が松阪で再建された。組合員数二〇一名、組合設立の頃から関わっていた梅川は三重合同労働組合執行委員に就任した。三重合同労働組は翌年一月二一日、県内の統一労組として大山峻峰が中心となって結成した三重労働組合協議会(三重労協)に加盟し、日本共産党の指導を受けて他の労組と共に県内の労働争議を活発化させた。

他方、農民組合に関しては、四六年五月三一日に松阪市立第一小学校で日本農民組合三重県連合農民協議会の創立大会が開かれた。組合員数六、二〇〇名、この大会で丸島浅次郎が県連執行委員長、遠藤陽之助が県連書記長に選ばれ、梅川が県連執行委員に就任した。この組合が「三重県農民運動はじまって以来の最大組織となり、戦前の未解放部落中心の小作人組合とはまったく性格を異にしていた」組織になったのは、(それが戦中の報国運動の遺物であったとはいえ)「増産班の末端機構」を組織の基礎として利用しながら「地主の土地取り上げに反対し、農地改革の徹底的断行の宣伝・啓蒙、天下り供出反対、小作料の引き下げとその金納化、供米割当ての民主化闘争等」を展開したからであった。日本共産党による指導の下、供出米に対する強権発動反対や農業会不正糾弾、供出を免れるための隠匿米摘発などの運動を積極的に展開した。とりわけ四七年の飯南郡花岡町の供米闘争は、県部落解放委員会との共闘で進められ、全国の人々の耳目を驚かす事件となった。

四五年八月一八日、上田音市は志摩郡磯部町の渡鹿野島の朝潮旅館に松田喜一や朝田善之助、野崎精二ら水平社運動の指導者を招待し、戦後の部落解放運動の再建について話し合った。解放運動史では「志摩会談」として著名なこの会合で組織の再建が決議された。翌年二月一九日、京都市烏丸通夷川の新聞会館で全国部落代表者会議が開催され、部落解放全国委員会（部落解放委員会）が結成された。上田は戦前の活動歴を評価され常任全国委員に選ばれた。同会では戦前から未解決であった朝熊区政差別事件を重要視し、四七年六月一二日に片山哲内閣総理大臣にその解決を求める要望書を提出すると共に、GHQに対しても同趣旨の要望を行った。このようにいち早く運動を再開させた部落解放委員会は、花岡村で軍政部の命令によって供米が過剰に割り当てられ、その供出が強制される事態が生じるに及んで、その反対闘争を開始した。当時花岡村農民のほとんどが日農県農民協議会に参加していたといわれ、長谷川多三郎町長も日本共産党員であった。県との折衝は数回に及んだが、過剰分を差し引いた自主供出という村側の妥協策は、進駐軍の命令であることを楯にして県当局が拒否した。四七年五月二二日から七日間、食糧緊急措置法違反の容疑で、運動の指導者を含む同村の農民一〇〇余名が検挙された。丸島浅次郎県連農民協議会執行委員長や遠藤陽之助同書記長、池端勘七同書記など六名が起訴され、津地方裁判所松阪支部で裁判が行われた後、（なかには控訴した者もあったが）最終的に六名全員が懲役刑を受けることになった。

## 二

四七年は梅川にとって二つの大きな出来事が起こった年であった。ま

ず二月一〇日、最愛の母とみが死亡したことが挙げられる。とみは一八七六年七月二九日、飯南郡（現松阪市）花岡村大字大黒田一八〇番屋敷の野口次兵衛の二女として生まれた。八〇歳で亡くなるまで彼女は、つねに梅川の精神的な支えであった。梅川には、自分が非合法活動に関わって投獄され、筆舌に尽くしがたい心労をかけた母に対する償いの気持ちがあった。とみの没後も梅川は終生にわたって彼女に対する感謝と敬愛を持ち続けていた。梅川は詩人として母の死に遭遇したときの心境を詩に書き記し、亡母を追悼している。以下いくつかの作品を紹介してみよう。

### 灰

凍てたあさ

火葬場の

くらい洞窟のやうな穴から

鉄板にのってひきづりだされた

ははの骨、灰よ！

それは灰、しろじろとした灰だった

もはやはではなかった

感傷のない灰であった

夜 わたしは

母をおもってねた

灰になる しろじろとした灰になる

食って 動いて 働いて 考えて しゃべって ないて あるいて

あらそって わらって 子を育て、  
死ぬ 灰になる

しろじろとした灰になる

みんな死ぬんだ

そして あの奇麗な灰になる

死が一瞬 小奇麗で

あまく あたゝかいものになって

むくむくとうれしさがわいてでる

なんと小ぢんまりと小奇麗な始末

うれしい 奇麗な結末！

母のきていたふとんをぐっと顔までひっぱって

わたしは久しぶりでぐっすりねた

—一九四七、二、一二—

母は千両役者であった

母のいない部屋は

しらじらとして広すぎる

茶筆筒を背にして

せなかをまるめ 火鉢をかゝえ

母がすわっていてくれると

部屋は

あたゝかく 明るく 部屋ぢゅうのもの

みんないきいきとしていた

母のいない部屋は

さむざむとしてひろすぎる

母は千両役者であった

千両役者は たったひとり踊っても

ひろい舞台もせまくなり 一ぱいになる

母は ほんとうに 千両役者であった

—一九四七、二、一四—

この二篇はいずれも母の死の直後に書かれた詩である。「灰」は、亡骸が火葬されて灰と化した衝撃から始められている。遺された白い灰を眺めていると、「わたし」の悲しみは、生きとし生けるものはみな必ず灰になるのだという宿命にたどりつく。すると悲嘆は次第に鎮められ魂が浄化されて行った、と書かれている。また「母は千両役者であった」は、いつも健気に立ち振る舞っていた母の姿が追想されている。人情に篤く存在感あふれる母—彼女が不在の部屋は白々として、また寒々として広すぎるという。これは愛する母を喪った作者の実感であっただろう。つぎに、死の直後から少し時間が経過し初盆を迎えた際に書かれた詩を紹介しよう<sup>(10)</sup>。

お盆

お盆がきました

母よ！

あなたの初盆だというので 兄は一生懸命です  
お盆などくだらぬことだという私を

母よ

あなたは一ばんよく知っていてくれました

母よ

今年のお盆は お味噌がなくて

盆汁も子供にすわせることができませんでした

しかし お粥をたべました

戦争のあの最中

一夏 かぼちゃばかりをあなたにくわせたことを そうしてまた

一夏 ほとんどじゃがいもばかりを

あなたにたべていただいたことを

すまなく 胸いためながらおもいだしております

これで結構やないか とあなたは すまなさそうな顔する私を

なぐさめ いたわるように

言い言いくれました

アメリカ軍放出のバタを おいもにつけながら

バタなどという バタくさいものをくえるようになった

あなた自身を笑いながら

たべていられた時々の

頬に寄ったしわじわを

母よ

私は いま

なきながら あざやかにおもいうかべております

ほんとうにすみませんでした

—一九四七、九、七—

右の詩によれば、母の初盆が来たとはいえ、自分にはまるで仏教心がない。だが母はそのような自分の不信心を理解してくれていた。これまでも自分が生活の足しにならない活動にばかりに従事していたために、いつも食卓は貧しかった。とりわけ戦時中は貧窮に喘いでいたが、母は少しもそれを苦に思わず自分を労わってくれた。進駐軍のバターを薯につけながら洒落をいって笑う母の顔を思い出し、「ほんとうにすみませんでした」と詫びるのであった。

ところで右の詩のなかには、家には味噌がないという表現がある。この理由は、四七年に梅川の身に起こった二つの大きな出来事のうちの二番目、三重県議会議員選挙に立候補したことと関係がある。この年は全国的にも大きな変化のあった年で、官公庁労組が主体となる予定であった二・一ゼネストがマッカーサーの命令で中止された。だが過熱した運動をすぐに鎮静化することはできなかった。それまで日本共産党系の産別会議と社会党系の総同盟との間で対立してきた労働組合戦線が統一され、全国労働組合連絡協議会（全労連）が結成される。また新憲法下で初の総選挙となる四月二五日の第二三回衆議院議員総選挙で社会党が第一党となって片山哲内閣を誕生させるという新しい事態が生じた。だが二・一ゼネスト失敗後、日本共産党のスト方針が強引過ぎたという批判が各労組のなかで起こっており、経済闘争を民主人民政府樹立のための闘争に発展させようとしていた党の戦略が根本的に批判された。

三重県でも二・一ゼネスト中止後、三重労働組合連絡協議会（三重労

連)が結成され、労働運動戦線の統一が図られた。そして梅川は日本共産党から公認を受けて松阪市選挙区から立候補した。定数二に対し候補者数四、四月三〇日の投票日に梅川は五、〇六四票を集めて見事第二位当選を果たした。投票率は八八、七パーセント、松阪選挙区の投票者数は一八、七六九だったので、約二六、九パーセントの得票率であった。当時、党の県会議員は全国で三名しかいなかったことや、二・一ゼネストの中止後、党のスト方針に対する批判があったことを考えれば、梅川の当選は快挙であったといえよう。

### 三

県議時代の梅川の事績として、四七年九月の全通三重地区協議会争議と一二月の三重県教職員組合連合会(三教組)争議の解決に奔走したことが挙げられる。全通三重地協は、地域的生活給の支給や家計の赤字補填資金の支給、引揚者並びにその家族に対する免税、配置転換反対などを名古屋通信局長に要求した。その後、労組と使用者との交渉が続けられたが結論は出ず、全通三重地協は地方労働委員会に調停を申請した。他方、三教組は、男女や勤務学校種別、修学年限において教職員の基本給に差が生じていたことを憂慮し、県知事に「凸凹是正」を要求した。県知事と交渉が続いたが結論は出ず、三教組もまた地方労働委員会に調停を申請した。梅川はどちらの争議においても労働者側の労働委員を務め、労組の要求を擁護した。後になって梅川は当時を回想し、「この争議について、青木知事から仲裁を依頼されたが、私は最初からハッキリと労働者側の立場にあることを伝え、大山氏と二人で裏面工作をやったが、争議全般は、大山プロデューサーの仕組みだったといえる」と述べている<sup>(1)</sup>。

右の引用文中に登場する青木知事とは青木理、大山氏とは三重労連書記長・大山峻峰のことである。

大山は一九一〇年二月九日、志摩郡加茂村(現・鳥羽市)に生まれた。加茂高等小学校卒業後、奈良で石版印刷版下見習工となって奈良合同労組の設立に参加した。その後、全農奈良県連の再建に携わって同常任執行委員となる。三七年、三重県に戻って全農三重県連常任書記に就くが、人民戦線事件で検挙され一〇ヶ月の禁固刑に処せられた。戦後は三重定期貨物自動車(三重定期)労働組合を再建し、さらに県労協発起人となって県内の労働組合の勢力結集を果たし同書記長に就いた。梅川にとって大山は終生の盟友となる活動家で、梅川の戦後の歩みを明らかにするために決して見落とせない人物である。ちなみに県議選では、梅川は大山の影響力が強い三重定期社員として立候補している。

大山は宇治山田の井阪次男・三男・湧子らと共に精力的に活動し、四六年六月、公選として全国最初のケースとなる宇治山田市(現・伊勢市)の市長選挙を実現させた。宇治山田は大山や井阪たちが中心となって戦後の労働運動を始め、他の地域に比べて民主同盟勢力の再建が早かった。他方、梅川にとって井阪次男は県立第四中学校(現・宇治山田高等学校)の一年先輩であった。次男は同校卒業後、早稲田第二学院仏文科に進学したが、病気のために卒業することはできなかった。その後も東京に滞在してプロレタリア文化運動に関わる。前衛芸術家同盟書記、プロレタリア映画同盟書記を務めながら、左翼劇場の裏方をしたり「戦旗」の編集を助けた。論説「映画団体は如何に闘ふか!」を「戦旗」第二巻二号(一九二九年二月)に発表している。四・一六事件以降は労働運動に転進し、神山茂夫や伊藤貞助、寺田貢たちと日本労働組合全国協議会(全協)再建運動に携わった。全協刷新同盟時代に神山と討議した

内容は、戦後に神山が発表した日本革命運動理論の基礎的部分になったと評価されている。神山は井阪の適切な助言に援けられて著作を記していたといわれるほど両者の思想的紐帯は強く、井阪は県内で神山派を形成した<sup>(12)</sup>。

四九年八月の第二回宇治山市長選挙に際して大山・井阪のグループが党から除名される。当初彼らは市長候補として山田地区委員会の党員を擁立していた。しかし全国的に社共合同を進めようとした党中央の意向を汲んで県委員会は、自党候補を取り下げて社会党候補を推すように命令してきた。前秋、昭電事件で芦田均内閣が倒れるという社会党にとって不利な情勢の下で共産党は党勢拡大を目指して積極的な社共合同運動を展開していた。地区委員会で決定した内容を上から一方的に覆そうするやり方に大山や井阪たちは挙って反発した。その結果、彼らには党活動停止と除名処分が下る。大山、井阪次男・湧子、鈴木邦彦、藤井元雄、佐藤銃一、黒田修一、永戸猪三ら山田地区委員会および南勢地区委員会のメンバーは「県委員会の決定に違反し分派行動を以て民主戦線を妨害しつつあるは最も重大な党規律違反」をしたとされた。コミンフォルムによる全面的な批判から党中央は五〇年に分裂するのだが、それに先んじて県党に亀裂が生じ始めていた。これは以後、さらに深刻なものと発展し、やがて梅川を巻き込んだ混乱へと拡大して行くのである。

五〇年六月二五日、朝鮮戦争が勃発するとGHQは占領政策を転換し、極東における反共勢力の軍事的な砦として日本を再評価した。経済復興を加速させると共に独自の軍事力を持たせ、資本主義陣営の一翼を担わせようとしたのである。さらにレッド・パージを断行し、「アカハタ」の無期限停刊と全労連の解散、「共産主義的分子」と見なされた全国の民間企業約一一、〇〇〇名および官公庁関係約一、二〇〇名が排除

された。ちなみに三重県内では、伊勢新聞社を皮切りにして一五事業所で六九名が追放された。前年来、官公庁や基幹産業では、すでに反共攻勢と人員整理攻撃が進められており、労働運動は甚大な被害を受けていた。党中央では朝鮮戦争直前、党中央委員二四名と「アカハタ」編集責任者一七名が追放され、徳田球一ら幹部は合法的な臨時中央指導部を地上に残して地下に潜伏した。五〇年の年頭、コミンフォルムによって従来の平和革命論を全面的に批判され党内は分裂、党内で激しい権力争争が生じていた。

地下に潜伏した徳田は、治安当局の追及を逃れて北京に脱出しようとした。三重でも嚴重な警戒体制が敷かれており、それを突破することは不可能であるように思えた。とりわけ鈴鹿峠は厳戒な警備がなされていたが、県議の梅川が峠を越える手助けをした。日頃から懇意にしていた三重定期のベテラン運転手に依頼し、運送品のなかに徳田を紛れ込ませたのであった。

このような反共の強い嵐のなかで、三重県議会議員選挙が行われた。前回同様、梅川は三重定期社員として日本共産党の公認を受けて松阪選挙区から立候補した。定数二に対し候補者数五、五一年四月三〇日の投票日に梅川は前回よりも一五三票多い五、二一七票を集めたが八四票差で惜敗した。投票率は八八・二パーセント、松阪選挙区の投票者数は二四、〇七〇だったので、前回よりも五・三ポイント下回る二一、六パーセントの得票率であった。梅川の敗北は、第四回全国協議会（四全協）の開催後、軍事方針を採って各地で武装蜂起を呼びかけた党に対する批判や県党内部の亀裂などが背景にあったといえよう。

ところで、この年の六月二六日、党員を中心として三重県平和懇談会が結成された。朝鮮戦争へのアメリカ軍の軍事的介入や日本の基地化・



再軍備化、単独講和に反対する運動を展開した。梅川はこの運動に関わっており、九月一日に松阪鉄工所が一時閉鎖を実施した際には、遠藤陽之助や山浦久治三と共に講和反対の講演会を同所内で開催している。この平和運動を通じて知り合ったのが、後に原爆関連文献の収集と研究に努め『原爆文学史』『原爆民衆史』を執筆する長岡弘芳であった。当時長岡は三重県立松阪北高等学校工業化学科の学生で、梅川の反戦平和思想に共鳴し、たびたび家を訪問した。梅川の家では、彼と議論するだけでなく、以前古本屋をしていた名残としてあった多くの蔵書を読ませてもらったという<sup>(13)</sup>。県議時代の梅川は新日本文学会に所属し、「島木健作の思い出—『癩』のもでるなど—」（『季刊関西派』創刊号、一九四九年七月）や「昭和殉教使徒列伝」（『伊勢公論』創刊号、一九五二年四月）などの評論を文芸誌に発表したり、地元の新新聞「夕刊三重」に随筆を連載したり、公務の合間をぬって創作活動も積極的に行っていた。

#### 四

二回目の県議選に落選した梅川は三重定期を退社し上京する。品川区五反田にアパートを借りて住み、日本共産党系の独立プロ・新光映画社に勤務した。党の活動資金を捻出する経理の仕事をしていた。新光映画社が製作した映画には、並木鏡太郎監督「右門捕物帖 謎の八十八夜」や中川信夫監督「当たり矢金八捕物帖 千里の虎」などがあり、嵐寛寿郎や宮城千賀子、徳川無声、古川緑波、沢村国太郎たちが登場している。長岡は梅川の下宿に「私たちが行くと八丁味噌系の濃い色の伊勢みそで、自分で味噌汁を作りのませてくれた。私たちの間では、その頃の彼が、人間的にもっとも懐かしいというのが定説である」と回想している<sup>(14)</sup>。

なぜ長岡は当時の梅川が人間的に最も懐かしいと思うのか、この理由は、すでに県党の間に亀裂が深まっていたことと関係がある。新光映画時代の五三年九月二三日から翌年九月一九日まで梅川は日記を書いている。いわゆる「東京日記」である。本来、筆の立つ人間であっただけに所思を存分に記しており、東京での新しい生活はもとより、戦前・戦中の回想や戦後の党に対する批判も書いている。たとえば「スパイ、反党的、反国民的裏切りもの」というレッテルを貼られて伊藤律が党から除名処分された際、梅川は「党の農民運動の面をながく担当していた」伊藤のために「地方のわれわれは大いに迷惑した」といい、「時々雑誌にのるものを見ても、受けた感じは理論のまちがいというより、無理論だったとおもう」と感想を述べている<sup>(15)</sup>。しかし処分理由を鵜呑みにするのではなく、「彼の理論のまちがいを理論的に解明し、またスパイ云々なら具体的事例を示し、ゾルゲ事件のことを言うなら、それを知りながら尚且、のさばらした責任を具体的にハッキリさす必要がある」と、党中央に対しても批判を展開している。

また梅川の日記には、県党の同志・遠藤陽之助に対する非難も見られる。憎悪さえ感じさせる筆致で遠藤の行状が詳らかにされるのだが、梅川の年譜によれば、県議選後（詳細は不明だが）党の活動方針に対し県党の内部で意見の対立をきたしていたという。日本共産党は当時、治安当局によって地下組織や活動家の摘発が続けられており、党を防衛するためにスパイや墮落分子の排除を強化する必要性に迫られていた。それと同時に、五三年四月の総選挙に惨敗して以来、党内では暴力革命路線に対する懐疑が出されたり、（保守系）改進黨首・重光葵を内閣首班に推して失敗した責任を問う意見が示されたりした。党中央はそれらの反発を鎮静化し、指導力を挽回するための方策を講じる必要があった。そ

こで全党的な党内抗争の手段として「スパイ挑発者」「分派主義者」を摘発し排除する総点検運動（第二次）が実施された。その結果、党内で過酷な査問や誤った処罰がなされ、誠実な党員までも「スパイ挑発者」「分派主義者」と見なされ、全国で九八名が除名され、四七名が活動停止の処分を受けるといふ異常な事態が生じたのである。

梅川の場合、彼の女性関係に「腐敗的傾向」が見られるとして他の同志と共に県党の査問にかけられた。梅川の妻きよは夫の活動のために苦難の生活を強いられ、重く圧し掛かった心労によって精神的な病に冒されていた。彼女が発病したのは戦前に遡る——アメリカに宣戦布告した日の翌朝、梅川は戦争非協力者に対する全国一斉検挙に遭って投獄された。治安維持法違反者として約二年獄中生活を強いられた後、監察に付す条件で出獄することになった。弁護士が帰郷の日を知らせてくれたのだが、彼女は勘違いをして一日早く国鉄松阪駅に出かけ、夫の到着を待ち受けた。だがいくら待っても夫が現れず、ついに発病してしまう。

解放運動に関わった活動家の家族には、さまざまな悲劇が訪れた。梅川の妻も一方ならぬ苦勞をし、最後には精神的に忍従の限界を超えてしまったのである。戦後、梅川は県議選などの政治活動を進めるなかで、妻とは別の女性と生活を共にするようになった。いろいろな感情が往来したと思われるが、梅川の子とも達もその女性の存在を認め、二人の間によりきパートナーシップが保たれ父の政治的信念が成就することを願っていたという。だが県党の査問委員会はその関係を「腐敗的傾向」として厳しく糾弾し、五五年三月に梅川を除名処分にする。

このとき梅川以外の多くの県党員にも党活動停止や除名処分が下っていた。一方的な処分は彼らに憎悪の感情を植え付けるものであった。『三重県における日本共産党のあゆみ』によれば、当時の状況に関して「総

点検運動（一九五四年）の展開によって誠実な党員に疑いをかけ一方的な処分がおこなわれるなど、県党の不団結はいっそう広がり、五五年には党勢は、四九年当時に比べて約五分の一と減退した」とされる<sup>16</sup>。

梅川を除名処分には、県党内部での主導権争いや同年四月二三日に予定されていた県議会議員選挙の党公認候補選定の対立が背景にあったと考えられる。新光映画社時代の日記に見られたように、遠藤陽之助との確執も存在した。また梅川は三度目の県議選立候補を希望していたのだが、県党は他の党員を考えており、調整の難航が予想された。右の事柄が背景にあって女性問題が梅川排除の単なる口実に利用されていたことは、後に県委員会が除名処分の誤りを認めていることから分かる<sup>17</sup>。

歴史的な政策転換として知られる党第六回全国協議会（六全協）は七月二七日から三日間開催され、党中央が「極左冒険主義」と「セクト主義」の自己批判を行い、五〇年の分裂以来、分派のレッテルを貼って党を除名した活動家に党への復帰を呼びかけた。そして一月九、一〇日に県活動者会議、さらに翌年二月二五、二六日に第一回県党会議が開催された。いずれの会議においても党中央の政策転換に沿う形で県党も自己批判を行い、梅川たちの除名処分を撤回する。『三重県における日本共産党のあゆみ』によれば「党の不団結、極左冒険主義、官僚主義、セクト主義などの誤りを克服して前進する方針を決定し、また戦後の党活動について一定の総括をおこなった。あわせて誤った処分で被害を与えた同志の名誉を回復した」という<sup>18</sup>。梅川を除名から六全協での総括までわずか四ヶ月、個人のプライバシーにまで立ち入って侮辱を加ええおきながら、党中央の意向に沿って処分を撤回するという党のあり方に納得が行かないのは当然であり、復党を勧められても梅川は拒否、脱党する道を選んだのであった。

## 五

梅川は三度目の県議選に際し、いずれの政党からの公認も受けず、三重合同労組委員長として、三重合同労組の他に鐘紡松阪労組、国鉄松阪地協の推薦を受けて松阪選挙区から立候補した。日本共産党から離れて出馬したために党組織による支援は得られなかったが、反共の意識が強い労働組合員や一般市民の票を取り込むことができた。定数三に対し候補者数七、一九五五年四月二三日の投票日に前回よりも一、六三七票多い六、八五四票を集めて見事二位当選、前回惜敗した雪辱を果たした。投票率は八七・〇パーセント、松阪選挙区の投票者数は四一、三三三だったので、得票率は一六、五パーセントであった。得票率は前回よりもさらに五・一ポイント下がったが、候補が乱立した激戦であったことを考えれば、手堅く票を上積みして当選を果たしたといえよう。

翌五七年一月一五日、後藤脩松阪市長が急逝する。梅川は松阪の労農組合に要望され、県議を辞職して市議選に立候補することを決める。候補者数四、三月三〇日の投票日に一九、九六一票を集めて当選、第六代松阪市長に就任する。投票率は七四・一パーセント、投票者数は四一、五八〇だったので、得票率は四八・〇パーセントであった。

梅川の当選は全国最初の革新市長の誕生を意味した。無所属であったが共産党員の前歴がある革新政治家が当選したことは、全国的に大きな反響を呼んだ。「夕刊三重」によれば、梅川当選の結果「松阪はさすがに左翼大衆運動の先覚都市だとの印象を強めた」が、「しかし市民の間ではむしろ『良識の勝利』として梅川氏の人間性を高く評価したと見る向きが多かった」という（一九六七年一〇月一六日号）。当選の第一声は「小母さんたちよ。市役所に用事があったらいつでも、エプロンかけ

でも地下足袋ばきでもどうぞ。土産に焼イモでも買って来てくれば、それを食べながらひざを突き合わせて話しましょう」と呼びかけた。市民から絶大な支持を集めた「人間梅川」の魅力の一端を伝えるエピソードである。

以後三期一年の梅川市政は、全国的に見ても先駆的な取り組みといえる事業が多かった。市の代表的な事業として、以下のものが挙げられる。六一年、学校法人梅村学園を誘致し三重高等学校が開学する。同学園は松阪で三重中学校、松阪女子中学校、松阪女子高等学校、松阪女子短期大学、梅村幼稚園、松阪大学と学校経営を拡充し、地域の教育の重要な拠点となっている。

また六三年には市制三〇周年記念事業として部落問題研究所（奈良本辰也所長）に市内三ヶ所の被差別部落の歴史と生活実態の調査を依頼し『都市部落—その歴史と現状』が刊行された。さらに翌年同研究所によって市内一七ヶ所の産業経済と生活実態の調査を依頼し『農村部落—その地域と社会』が刊行された。いずれの報告書にも梅川は序文を寄せているが、前者の序文の冒頭には、調査依頼の動機を次のように述べている。

本書の調査対象となっている部落の人々と交るようになってからすでに三十年になる。爆発的な水平社の活動、それを基盤として農民運動が組織されていった頃、日本農民組合の初期以来である。その間、いろんな、いわゆる「革新的」活動が起り、発展し、解消し、挫折していった過程を見聞きしてきた。見聞ではなく、私自身、時にはその組織員の一名として参加した。にもかかわらず、さて、と私自身をかえり見る時、部落のことについては、範囲は広くても、断片的な知識しか持ち合わせていないのに気づくのである。現在もそうだが、過去においても、しばしばそれに気づかされたものであ

る。

かねがね部落の実態を総合的に調査したいものだと考え、やって見ようと手がけたこともあった。しかし単なる個人やグループの手に負える仕事ではなかった。冷静で客観的で、勇ましい政治的発言を抜きにしての総合調査。しかも歴史的にも学問的批判にもたえ得る調査。これが私の念願であった。部落問題研究所から次々出される高度で、いろんな意味で建設的な調査報告を読んで、私の念願はさらに強いものとなっていった。

緻密な調査と高度な実証性に裏づけされた両書は期待通り、当時の被差別部落研究の領域で最高水準と評価される研究となった。

同じく市制三〇周年記念事業として三八年一〇月には淡交新社から写真集『松阪』（松阪市編）が刊行された。同書には、郷土の人物や風景を撮った写真と奈良本辰也や佐佐木信綱、梅川たちの寄稿文が収められている。梅川の「松阪に描く夢」は、彼が文化財保護委員・日本民俗会会員であった立場から、松阪の地理や歴史、民俗が詳しく紹介されている。「松阪に描く夢」のなかに「松阪肉は東京市場で確固たる地歩を占めるに至った。東京といえ、かつては神戸肉であり、ついで近江肉であった。今日では松阪肉である」という一文がある<sup>9)</sup>。予算折衝や陳情などの公務で上京した際、梅川はいつも松阪肉を持参して、その普及に努めたという。肉牛飼育農家の品質向上の努力はいままでもないが、松阪肉のブランド化に一役買っていたのである。

他方、梅川は松阪市民に呼びかけて、戦没した市民の手紙を収集した。遺族から寄せられた一、五二〇通の手紙やハガキを編集して六六年二月、『ふるさとの風や 松阪市戦没兵士の手紙集』を三一書房から刊行した。それら手紙のなかには日露戦争で亡くなった兵士のものも含まれていた。

同書刊行の目的について序文で、梅川はつぎのように記している。

この書は「英霊」の赫々たる武勲をたたえ回想しようとするものではない。

「神兵」といい「英霊」という、むなしく美しい言葉によって、切なる家族の思いとは別に、こともなげに抹消され埋没させられていった、なくなった人たちの素朴、純情であたたかい人間性を探究すること。そしてどんなに美しい、もっともらしい口実や理屈や理論をつけようとも、他国を傷つけ侵略するような戦争には反対し、平和をどのように維持していくかを、静かに思い、考え、静かに不戦の決意を持つ手がかりともなり得たら、との発想からの企画である。

平和を願い、平和を訴え、平和のための数石の一つにでもなれば、との想い、悲願からのものである。遺族の方からの感違いから「勇ましかったより」のみ提出されるのをおそれた編集者の苦労もここにあった。

なお同書の巻頭には、二三歳の若さで戦死した竹内浩三の「骨のうたう」という詩が掲げられた。戦争の悲劇を説き不戦の誓いを広める『ふるさとの風や』は今も松阪の学生たちに読み継がれている。

## 結

六五年三月、梅川は三期目の松阪市長選挙に当選する。同年九月に中国外交学会から招聘され、全国市長代表団団長として中国を視察旅行する。一ヶ月にわたる旅行について新聞「夕刊三重」に約半年間、「中国あっち、こっち」という旅行記を断続的に連載した。翌年一〇月、新聞

原稿をもとにした『途方もない国』が御茶の水書房から出版される。同書の校正作業中に文化大革命が起こった。紅衛兵の行き過ぎた行為が日本で報道されると、旅行中に目撃した、北京の街頭で交通規則を守らない大人を子どもたちが取り囲んで激しく責め立てている情景を想い出したという。

梅川は市長職の激務から体調の衰えが目立ち始め、六八年一月一九日、松阪市民病院に入院した。検査の結果、肺ガンと診断された。同年の元日から死去直前の四月一日まで日記を書いている。いわゆる「病床日記」で、そこには一日一日と病が篤くなる経過が記されている。抗ガン剤の副作用が激しく体の衰えが自覚されているが、それでも六一年から「広報まつさか」に連載を続けてきた「市長サロン」の原稿を書いたり、六七年九月から「朝日新聞」に連載を始めた「東海随想」を執筆したり、と最後まで創作意欲は持ち続けていた。大山峻峰に勧められて、戦前「詩精神」に発表した自分の詩や評論を整理してみようと思うようになっていた。

梅川が死去する五年前、彼とは小学校以来の付き合いがあった小津安二郎が咽頭ガンで逝去していた。梅川は小津が入院していた東京築地の国立がんセンターを訪れて旧交を温めた。小津は病床にありながら、大阪やその近郊の風物を背景にぜひ映画を一本撮りたいと話していたという。そのまま小津が亡くなったので、その夢は実現することがなかった。残念ながら世界的に名高い小津映画に松阪の町は一度も登場しないのである。故郷の先輩を見舞うという機会を通じて末期のガン患者の病状を知っていた梅川は、自分の本当の病名に気づいていたかも知れない。

また病床にありながら東京三越で本居宣長展を開催する計画を立てるなど、郷土の賢人・本居宣長の顕彰に努めた。彼が設立発起人となった本居

宣長記念館は、彼の遺志を受け継いだ吉田逸郎市長によって一九七〇年に建設された。現在、同館の収蔵品は約一六、〇〇〇点を数え、松阪市民はもとより全国の宣長愛好家に資料を展示すると同時に、すぐれた研究業績を重ね宣長研究の発展に貢献している。

家族や知人による手篤い看護がなされたが、ついに病は癒えず、四月四日午後一〇時五〇分、梅川は死去した。享年六一。一日には市葬と地区労による労農葬が行われた後、大山峻峰や石垣国一、河合秀夫ら同志と共に自らが設立に携わった三重県解放運動無名戦士の碑に合祀された。無名戦士の碑の建立は、二八年、天皇即位大典の予備検束に遭った日農三重県連合会常任書記・大沢茂が留置所内で急死した際、白色テロルに抗議する人々によって計画されたものであった。大沢と梅川とは、宇治山田中学校の同級生、卒業写真には隣り合って写っている。非業の死に斃れた友のことを梅川は終生口にすることはなかったという。聡明で信望が厚く野球部で活躍していた友、卒業後も解放運動の最前線で活躍した友の死には、堪えられない悲しみを感じたであろう。

その後、解放運動無名戦士の碑は、治安当局による監視や用地確保、資金調達などの問題が立ちはだかつて、長らく計画が実行されずにいた。だが六四年になってようやく機が熟し、多くの人々の協力によって建立が可能になった。松阪市篠田山墓苑内に碑が建立され、第一回分として一四三柱が合祀された。黒田寿男の筆による碑文は、梅川が撰文したものであった。その碑文を引用することを通じて、梅川をはじめとして県内の解放運動に尽力した活動家諸氏の冥福を祈りながら本稿を閉じたい。プロレタリアートは自分の鎖より外に失うべき何物も持たない。そして彼らは獲得すべき全世界を持っている。

この碑はたとえそれへの道が、どんなに困難に満ちていようと、この全世界を一日も早く獲得せんと、金も地位も望まず、権力にも屈せず、希望をすてず解放戦線の無名の一兵卒として限らない誇りを持って、悔ゆることなく戦った人たちの功績を讃えるために建立した。

この碑は永遠である。

# 註

本論文は拙稿「梅川文男研究（一）」——プロレタリア詩人、堀坂山行の軌跡——「人文論叢」第一八号、二〇〇一年三月、「プロレタリア詩人・梅川文男（堀坂山行）とその時代」——松阪事件に至るまで——「三重大学日本語学文学」第二二号、〇一年六月、「梅川文男研究（二）」——プロレタリア詩人、堀坂山行の淡路時代——「人文論叢」第一九号、〇二年三月、「プロレタリア詩人・梅川文男（堀坂山行）とその時代（二）」——三・一五事件に至るまで——「三重大学日本語学文学」第二三号、〇二年六月、「島木健作と梅川文男（堀坂山行）」——「頼」をめぐる——「近代文学試論」第四〇号、〇三年三月、「透谷を嗣ぐ詩人たち——「詩精神」と梅川文男——」——「国文学」第一七六・一七七号合併号、〇三年三月、「梅川文男研究（三）」——戦前の部落解放運動とプロレタリア文学——「人文論叢」第二〇号、〇三年三月、「梅川文男研究（四）」——プロレタリア詩人・堀坂山行と反ファッショ人民戦線——「人文論叢」第二二号、〇四年三月、「プロレタリア詩人・梅川文男（四）」——「三重大学日本語学文学」第一五号、〇四年六月の続稿である。また拙稿「プロレタリア詩人——梅川文男のこと」——「学塔」第一〇六号、三重大学附属図書館報、二〇〇一年一〇月、「小津安二郎の中学生時代・仄聞」——「三重シネマレター」創刊号、〇一年五月）も合わせてご覧いただきたい。なお引用文中、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現が見られるが、

歴史的背景を知るための資料として修正を加えずにそのまま引用した。また旧字体は新字体に改めている。

- (1) 『三重県史』資料編（近代Ⅱ、政治・行政Ⅱ、一九八八年三月、九四〇、一〇一二頁）
- (2) 『地域史のなかの部落問題——近代三重の場合』二〇〇三年三月、部落解放・人権研究所、二八〇頁
- (3) 『融和時報』第一五五号（一九三九年一〇月一〇日）および『同和事業関係資料 三重県』（三重県厚生会編『三重県部落史料集』近代編、一九七四年一二月、六九〇頁）。黒川みどり氏によれば、満州移民を正当化する上田音市の態度は「そもそも部落という存在自体を否定してかかる立場」であったという（前掲『地域史のなかの部落問題——近代三重の場合』、二九七頁）。
- (4) 三重県商工労働部労政課編『三重県労働運動史』（一九六六年三月、七四頁）
- (5) 『戦争捕虜二九一号の回想 タイメン鉄道から南紀イルカへ』（二〇〇〇年一月、三重大学出版会、二二四頁）
- (6) 『日本農民運動史』（一九四一年四月、東洋経済新報社、六五四頁）
- (7) 『三重県における日本共産党のあゆみ』（一九九八年五月、日本共産党三重県委員会編、二八頁）
- (8) 前掲（6）、六五四頁
- (9) 『やっぱり風は吹くほうがいい 梅川文男遺作集』（一九六九年一二月、盛田書店、六四〜六七頁）
- (10) 同右書、七四〜七六頁
- (11) 前掲（4）、七八一頁
- (12) 井阪篤子『井阪次男をしのぶ』（私家版、一二五頁）
- (13) 『さあ馬にのって——長岡弘芳遺稿集』（一九九四年七月、武蔵野書房、六五頁）
- (14) 同右

- (15) 前掲(9)、二一五頁
- (16) 前掲(7)、三八頁
- (17) 「日本共産党第一回三重南部地区党協議会報告(案)」(『三重県史』資料編、現代I 政治行政 一九九二年三月、四九四頁)
- (18) 前掲(7)、三九頁
- (19) 『松阪』(一九三八年一〇月、淡交新社、一〇一頁)